

特集

どう発展させる 病院総合医

「総合医」に関する議論が活発になってきた。診療する対象や分野を限定し、その質を向上させようとする専門医に相對して、幅広く何でも受け入れ、診療しようとする「総合医」の流れはいわば時代が求めている国民ニーズと言えよう。

医学の発展は先端科学の進歩と相まって専門分化の道を進んできた。科学的な解明を重んずるばかりに遺伝子のレベルにまで医科学は進んだものの、科学では説明のつかない患者を取り巻く状況に対しては眼をつむりがちだ。多くの医師は科学的に裏付けのある技術や手法には積極的に取り組むものの、患者の一見理不尽な訴えや、解釈不能な病態には一転して佇んでしまう。勢いあやふやな人間全体を理解しようとするのを早々にあきらめ、疾病や臓器を限定し、自信を持って腕が奮える分野に進もうとする。

多くの臨床医の教育は、実際の患者の病気の未分化な状態、不安定、不確実な病態を見据えながら診療に導くことより、病状が落ち着き、責任病巣がはっきりしてから介入に重きを置いてきた傾向は否めない。多くの臨床医は初期救急や、病態が複合的な患者を嫌い、専門技術を安心して発揮でき、社会から評価されやすい「神の手」を志向する。結果として医師は紹介患者を受け入れる側の総合病院の専門医を志すが、評価が低く、病初期の臨床決断が予後を左右しがちなリスクの高い地域の現場を敬遠してきた。地域医療の崩壊の原因の1つは、そんなわが国の医学教育の偏りの結果といっても過言ではない。

「病院総合医」は、現在全国各地の地域病院で今最も求められている「患者の診療の求めに対して“私の専門ではない”と言って、はなから逃げない」医師だ。もちろんすべての患者に完璧な診療ができるわけではない。まずは診て必要に応じて紹介することで、限られた医療資源を有効に活用する医療のキーパーソンとなりうる存在でもある。

今、臨床医の教育はまさに地域の現場に戻るべきなのだ。あれこれ提供者側の論理にくみして専門分化する前に、すべての国民の医療ニーズを原点にした必要十分な提供体制の再構築とそれに基づく医師養成が望まれている。国民もとにかく最初から専門医療に到達できることが最良であるかのような盲信を捨てて、「まずは診てくれる医師」が抱えるリスクを理解し、起こりうる不利益をともに受容するべきだ。患者と医師の信頼関係がない限りリスクを冒してまで「何でも診てくれる気概ある医師」は育たない。質の高い総合医を育成することができるかどうかは日本の明日の医療を決めることになる。

山田 隆司

台東区立台東病院管理者・院長